

第三世界からの証言

橋本福夫 編

學藝書林版

全集・現代世界文学の発見 9 第三世界からの証言

発行者 渡辺泰孝

印刷者 和田彰三

発行所 株式会社學藝書林

東京都中央区八丁堀二の三の五

〒番号 一〇四 振替東京 一〇八二一

印刷・製本 東洋印刷

昭和四十五年十一月三十日第一刷発行 ©

八八〇円

0398-120209-1000

目

次

虐げられし人々 アスエラ 高見英一訳

5

夜の彷徨 アレックス・ラ・グーマ 酒井格訳

123

ムグ ワ キビロの予言 ケニヤッタ 野間寛二郎訳

205

物騒な客アジャンタラ テュテュオーラ 鮫島重俊訳

215

呪文 ディブ 木島始 荒木のり訳

223

第一回黒人芸術祭国際フェスティバルの役割と意味

サンゴール 井上謙治訳

235

南アにおける文学と抵抗／アフリカ文学の背景／詩

クネーネ 中川忍訳

243

死刑執行人のストライキ

アーナンド 鯨島重俊訳

271

グアテマラの週末

アストゥリアス 大林文彦訳

279

解説 第三世界の文学

橋本福夫

319

監修

野間 宏

堀田 善衛

長谷川 四郎

佐々木 基一

編集

橋本 福夫

装本

原 弘

アスエラ「虐げられし人々」(高見英一訳)

マリアーノ・アスエラ(一八七三—一九五二)メキシコの作家。メキシコ革命が起きるとマデロを支持し、軍医として革命軍に参加した。「虐げられし人々」(一九一六)は多分にこのときの経験にもとずいている。ほかに革命の周辺を描いた「ボス」(一九一七)、「蠅」(一九一八)やメキシコ・シテイの下層社会を扱った「蝨」(一九三二)、革命後の社会問題をとりあげた「新興ブルジョア」(一九四二)などが有名。その他多くの小説を発表しているが、いずれの作品にも作者の社会改革にたいする烈しい情熱と暗いペシミズムがうかがわれる。

虐げられし人々

第一部

第一章

「けものじゃないったら……お聞き、あのひどい犬の吠えかたを……人だよ、きつと……」

女は山中の暗闇に瞳をこらした。

「それなら政府軍の兵隊だってことかい」

部屋の片隅に膝組みをして坐り、右手に素焼きの皿を、もう片方の手に丸いトルテリーリヤのパンを持って軽く腹ごしらえをしていた男がこたえた。

女はそれには返事をしなかった。心はあばら家の外にあった。

近くの石の原から蹄の音が聞え、犬のパロモはいっそう烈しく吠えたてた。

「どっちみち、隠れる方がいいんじゃないの、デメトリオ」男は顔色ひとつかえないで腹ごしらえをすませ、水さしを引き寄せて両手で持ち上げるとごくごくと飲んだ。それから彼は立ち上がった。

「ライフルは寝ござの下だよ」声をひそめて女が言った。

獣脂のろうそくの灯がせまい部屋の中を照らしていた。片隅にはくびきやすきやメキシコ竹の筥や、その他いろいろな百姓道具が立てかけてあった。ベッドがわりに、天井からなわで日乾しれんがの型枠が吊してあって、そこに男の子がマントや色あせたぼろ布にくるまって眠っていた。

デメトリオは腰に弾帯を巻きつけ、銃を手にとった。彼は背の高い、逞い男であった。血色のよい顔で、あごひげは生やしていなかった。木綿のワイシャツとズボン、つばの広い粗末なソンブレロという身なりであった。彼はのっそりと外に出ると、夜の一寸先も見えないような暗闇の中に消えて行った。

怒り狂ったパロモは早くも裏庭の柵を跳び越えていた。突然一発の銃声が聞えた。犬はひと声低くうめいただけで、そ

れつきり吠えなくなつた。

馬に乗つた男たちがどなりちらし、悪態をつきながらやつて来た。二人が馬をおり、一人はそのまま馬番に残つた。

「おい、女ども……何か食い物はねえのか！……卵でも、乳でも、いんげん豆でも、何でもあるものでいいんだ。なにしろ、もう腹が減つて死にそうだ」

「まったくひでえ山だよ！……ここで迷わねえ奴は悪魔ですぜ！」

「悪魔だつて迷子になるつていうものさ、軍曹、お前みたいに酔つ払つていたらな」

一人は肩章を、もう一人は赤い袖章をつけていた。

「ここは誰の家だい、おぼちゃん……それにしても一人だけで……ここはあき家なのか」

「それにしちやあ、その灯は？……それに、その餓鬼は？……おぼちゃん、俺たちは飯を食いたいんだ。さっさとしろ。出て行くのかい、それとも追い出されてえのかい」

「このならず者達め！ あたしの犬を殺しちまつて！……かわいそうに！ うちのバロモがなんでこんな目にあわなけりやあならなかつたんだい。お前さん達に悪いことでもしたつて言うのかい」

女は真白なまるまと肥えた犬を引きずつて中に入った。犬は目からはすでに生気が消え、ぐったりとなつていた。

「見ろ、軍曹、ほつぺたを真赤にしてるぜ！……ねえお前さん、そんなに怒らないでよ、必ず俺がお前さんのうちを焼^ヤ害にしてあげるから。本当にさ！……」

こわいお目目をしてはいや

もう恨まないでちょうだいな

やさしく見つめてちょうだいな

かわいいかわいいぼくの女^メ

士官はしわがれ声で歌い終つた。

「かみさん、この小さな部落は何というんだね」軍曹が尋ねた。

「リモンだよ」女は仏頂面でこたえると、さっさとたき火の燃えさしを吹いたり、薪を寄せたりした。

「ではここがリモンなのか……あの有名なデメトリオ・マシーアスの郷里の！……お聞きになりましたか、中尉殿。われわれはリモンに来ているのですよ」

「リモンだと？……そいつは都合だ……畜生め！……分るだろ、なあ軍曹、俺がこれから地獄へ行くとすれば、今が絶好のチャンスだぞ……けつこうな馬に乗つて行けるからな。

見ろ、この色の黒い女のかわいいほつぺたを……かじりつきたくなるようなりんごのほつぺたを！……」

「お前さんはあの山賊を知っているはずだ、なあ、おかみさん……俺は奴とエスコベードの監獄で一緒だったんだ……」

「軍曹、テキーラを一本持って来てくれ。今夜はこのかわい
いご婦人と仲よくすごすことにしたぞ……大佐だと？……こ
んな時間に大佐もへったくれもあるものか……かつてにしろ
だ！……腹を立てようと、俺は……畜生め！……さあ、軍
曹、伍長に鞍をはずしてまぐさをやるようにいえ。俺はこの
ままここだ……おい、姉ちゃん、卵を揚げたり練りもちをあ
つためたりするのは、そんなことは軍曹にまかしたときな。さ
あ、お前さんは俺と一緒にこっちへ来な。見なよ、この財布
を、札がぎっしりだろ、みんなお前さんにやるよ。いいから
とつときな。わかるだろ！ 俺はちつとばかり酔っ払ってい
るんだ。そんなわけで話す声もしやがれているのさ……俺は
のど、ちんこの半分はグアダラハラにおいてきた、そして残
りの半分はここにくる道中でつばといっしょに吐き捨ててき
たんだ……こんなことはどうでもいいさ、なあ……まあ、と
つときな。軍曹、テキーラだ、テキーラを一本持って来い。
姉ちゃん、さあ、そんなに遠くにいないで……そばに来て一
杯やりな。なに、いやだって？……お前さん、こわいのかい
……お前さんの亭主がよ……それとも、なんかそんなものが
よ？……もしそいつがどこかの穴の中にでもぐりこんでい
るのなら出て来なうってやいな……俺はだな、畜生！

……断っておくがな、俺はねずみ野郎たちなんか屁とも思っ
ちやいねえんだから」

突然、白い人影が入口いっぱいに浮きあがった。

「デメトリオ・マシーアスだ！」軍曹は青くなつて叫ぶと、
二三歩あとじさりした。

中尉は立ちすくんだまま、口もきけず、銅像のように動か
なかった。

「こいつらを殺して！」女は渴ききつた喉から声をふりしぼ
つて叫んだ。

「すまん！ かんべんしてくれ！……俺は知らなかったんだ
……これでも俺は勇敢な人をほんとうに尊敬しているんだ」

男達をじろじろと眺めていたデメトリオの顔に強慢と輕蔑
のまざりあつた微笑が浮かんた。

「俺は勇敢な人を尊敬しているばかりではない、好きなんだ
……さあ、友だちの手だ、握手してくれ……そうか、いいん
だ、デメトリオ・マシーアス、あんたは俺を相手にしてくれ
ないのだな……あんたは俺という人間を知らないからだ、こ
んなとんでもないさもしいところを見られてしまったんだか
ら……どうしようというんですか！……わたしは哀れな男で
す、養わなければならぬ家族をたくさんかかえているん
です！ 軍曹、失礼しよう。俺はいつだって勇士の家を、ほん
とに男らしい男の家を尊敬しているんだ」

第二章

男達の姿が見えなくなると、やにはに女はデメトリオにしがみついた。

「やれやれ、ほんとにびっくりしたわ！ あたしはてつきりあんたが撃たれたと思っていたの！」

「すぐ俺の親父の家に行きな」デメトリオは言った。

女は彼をそのままいつまでも抱きしめていたかった。女は頼んだ。泣いた。しかし、彼はやさしく彼女を押し離すと、憂うつそうにこたえた。

「あいつら、みんなを連れてまたやって来るような気がするんだ」

「なぜ奴らを殺さなかったの」

「きっとまだ寿命があつたのだろう！」

彼らは一緒に外に出た。女は男の子を抱いていた。出口のところで二人はすぐに別れて反対の方角に向かった。

山地一帯に淡い月の光が充ちていた。

岩山に、あるいは茂みにさしかかるたびに、デメトリオは子供を抱きかかえた女の痛々しいシルエツトを目で追いつけるのであった。

何時間も登ってから、目を転じて谷底の流れのあたりを見ると、大きな炎が上がつていた。

自分の家が燃えていた……。

デメトリオ・マシーアスが断崖の下に向かって下りはじめた時は、まだすべてが闇に包まれていた。巨大な亀裂の縞模様を見せる岩場と一刀のもとに切断されたような数百米に達する水落しの間の狭い斜面がどうにか道になっていた。

すばやく下りて行きながら彼は考えていた。『政府軍の奴らは、すぐに俺たちの跡をかぎつけて、犬みたいに襲いかかって来るだろう。幸い連中は山道には不案内だ。出口も入口も知っちゃあいねえ。ただモヤウアの間人が連中の道案内に立っていたらことだぞ。リモンやサンタ・ロサやほかの山の部落の連中なら堅いから俺たちを売るようなことはねえのだ……モヤウアには山じゅうかけ回って俺を追っているボスがいる。あいつは俺が電柱に吊るされてだらりと長い舌を垂れているのを見たら大喜びするだろうな……』

こうして断崖の底に辿り着いた頃、ようやく空が白みはじめた。彼は石ころの間にながながと横たわって眠りこんだ。

川は小さな滝をいくつも作っては、さらさらと音をたてて這うように流れていた。小鳥たちはピターヨの樹々に隠れてさえずっていた。せみのものうい鳴き声は人里離れた山奥に

神秘的な趣をみなぎらせていた。デメトリオは、はっとして目を覚ますと、浅瀬ぶたいに川を渡って溪谷の反対側の斜面にとりついた。わななく手で突き出た岩や木の枝を掴み、震える足で小路の小石を踏みしめて切り立った岩をありのようによじ登った。頂上に迫り着いた時には、高原は太陽の光を浴びて黄金の湖のように輝いていた。断崖に目をやると、一つ一つ切斷されたような巨大な岩々が、アフリカ人の頭を思わせる奇妙な形に突き出した岩々が、関節の硬直した巨人の指のようなピターヨの樹々が、奈落の底に向かってさかさまに倒れている樹々が見えた。岩と枯木の荒涼とした風景の中に清楚なサン・ファンのばらの白い花々が咲き誇っていた。それは岩から岩へと黄金の糸を静かに繰り広げはじめた太陽への純白の供物のようであった。

デメトリオは山頂にたたずみ、右手を後にまわして背中に吊っていた角笛を引き寄せて、ぶ厚い唇にあてると、三度、ほほをふくらませて吹き鳴らした。正面の峯のむこうから、三度、口笛が鳴って彼の合図にこたえた。遠くのあしやくさったわらの円錐形の堆積の中から、一人また一人と大勢の男たちが古い銅のように黒光りする胸を見せて裸足で出て来た。

急ぎ足で彼らはデメトリオを迎えに來たのであった。

「俺の家は焼かれちまったよ！」彼は人々の物問いたげな視

線にこたえた。

呪咀と威嚇と非難の声が湧き起こった。

デメトリオは彼らに思う存分怒りをぶちまけさせた。それからワイシャツの下から酒のびんをとり出して、少しばかり飲むと、手の甲でびんの口を拭いてから隣にいた男に手渡した。びんは口から口へと一巡してからになった。男たちはあらためて舌なめずりをした。

「神様のお赦しがあれば」デメトリオは言った。「明日か、それとも今夜にでも、もう一度政府軍の奴らの面を見てやろう。どうだ、みんな、奴らにこのへんの小路を教えてやろうじゃねえか」

半裸の男たちは大歓声をあげてとび上がった。それから再び罵ったり、悪態をついたり、おどし文句を並べたりしていた。

「奴らの人数がどのくらいか分らねえんだ」デメトリオはこう言って人々の表情を伺った。「フリアン・メディーナはな、オストティバキリーヨでな、六人の文無し男と白石でといだ六本のナイフだけで町じゅうのおまわりや政府軍の奴らと渡り合ってやつつけちまったんだぜ……」

「俺達だってメディーナの連中に勝るとも劣ることはねえぞ」目もとのやさしい、毛虫眉毛でひげ面の男が言った。筋骨逞い男であった。

「明日、もしこの俺がモーゼル銃と弾帯とズボンと靴を手に入れられなかったら、俺はもうアナタシオ・モンタニエースとは名のらんぞ、きつとだぜ」彼は続けた。「嘘じゃねえぞ！……おい、コドルニス、お前さんは俺の言うことを嘘だと思っているな。俺のからだの中にはな、鉄砲だまが六箇もおさまっているんだぜ……嘘だと思ふなら、デメトリオ兄貴に聞くがいいや……鉄砲だまがこわいと言ったところで、なあに、この俺にとっちゃあ鉛玉みてえなものよ。こいつ、まだ信じられねえのか」

「アナスタシオ・モンタニエース万歳！」

マンテーカーが叫んだ。

「そうじゃねえ」相手はこたえた。「われらの隊長デメトリオ・マシーアス万歳！ 天にまします神さま万歳！ 聖母マリアさま万歳！」

「デメトリオ・マシーアス万歳！」一同が叫んだ。

彼らは乾いた牧草や薪で火を起こし、おき火の上に新鮮な肉きれをひろげた。それから火のまわりに車座になって膝組みをして坐り、おき火の上でよじれたり音をたてたりしている肉の匂いをすきつ腹を押えてかいでいた。

彼らのそばの血に湿った土の上には飴色の牛の皮が山のように積んであった。二本のアカシヤの樹の間にはいぶし肉がひもで吊してあった。日光や風にさらして干すためなのだ。

「さて」デメトリオは言った。「俺の三〇・三〇式の銃を別とすれば俺たちには二十挺しかないな。相手が小人数だったら一人残らず撃ち殺してやる。大勢だったらおどしあげて追っ払ってやるぞ」

彼は腰の帯をゆるめて結び目を解くと、中にあったものを仲間たちに与えた。

「塩だ！」

彼らは狂喜して歓声をあげると、めいめい指先でつまんだ。

食るように口に運んだ。そして充ち足りるとながながとおむけにからだを伸ばしてもものうく悲しげな唄を、一節ごとにかん高い叫びを入れながら唄っていた。

第三章

山の茂みの中でデメトリオ・マシーアスの二十五人の部下は眠っていたが、角笛の合図に目を覚ました。それはパンクラシオが山の巨大な岩の上で吹き鳴らしたものであった。

「時こそきたれだ！ おい、みんな油断するなよ！」ライフルのばねの具合を調べながらアナスタシオ・モンタニエースが言った。しかし一時間たっても聞えてくるのは草原のせみしぐれと水溜りで鳴くかえるの声だけであった。

残月の光が夜明けのかすかにばら色がかった曙光の中に消えかけた頃、一人の兵士の最初のシルエツトが小路の一番高い端にくっきりと現れた。それに続いて何人かが、それから十人、さらに百人。しかし、全員ただちに暗い陰の中に消えてしまった。きらめく太陽が顔を出した。そのとたんに溪谷が人で、おもちゃの馬に乗ったごま粒のような人間で埋まっているのが望見された。

「見てみるよ、きれいなもんじゃあねえか！」パンクラシオが叫んだ。「さあ、みんな、奴らをからかつてやろうぜ！」

動き回る小びとの人形は樫の木の林の茂みの中に消えたりさらに下方の褐色の岩山の上に、黒い影を現わしたりしてい

た。

将兵の声がはつきりと聞きとれた。

デメトリオは合図をした。銃のばねのきしる音がした。

「撃て！」低い声で命令した。

二十一人の政府兵が馬から転がり落ちた。残りの連中は度胆を抜かれて岩肌に薄肉彫りのようになって動かなくなってしまった。

再び一斉射撃がおこり、また二十一人の男が頭を割られて岩から岩へと転落していった。

「出てこい、山賊野郎！……くたばりぞこないめ！」

「くたばれ、とうもろこしどろぼう！」

「くたばりやがれ、牛どろぼう！」

政府軍の兵士たちは敵の方に向かって叫んだが、相手は姿を現わさず、ひっそりと沈黙したまま、かねてから定評のあった照準の確かさを誇示しては悦に入っていた。

「いいか、パンクラシオ」白いところは目と歯だけで、あとは真黒な人物、メコが言った。「こいつはあそこのピターヨの樹のむこうを行く野郎にだぜ！……畜生！ これでもくらえだ！……やったぜ、頭のどまん中だ！ どうだい！……こんどはあし毛の馬に乗ってる奴だ……くたばりやがれ、ろくでなし！……」

「こんどは、小路の端に出てくる奴に一発お見舞いしてやる

ぞ……川底まで落っこちて行けなくても、まあ、そのへんまでは行けるだろう、この偽善者め……どうだ！……見たかい……」

「おい、アナスタシオ、ひでえじゃねえか！……俺にもお前のライフルを貸せよ……頼む！一発だけでもいいから！」
マンテーカー、コドルニスそのほか武器を持たない連中は、鉄砲を貸してくれ、後生だから一発なりと撃たせてくれとばかりに頼んでいた。

「男なら出てこい！」

「首を出せ……風野郎め！」

山から山へと叫び声ははつきりと聞こえ、まるで道をはさんで対峙しているかのようであった。

突然、コドルニスが裸で姿を現わし、政府軍に対して牛でもあしらうような恰好でズボンをひらひらさせて見せた。とたんに弾丸がデメトリオ軍の上に雨霰と降りそそいだ。

「おんや、まあ！頭に雀蜂の巣でもぶつけられたみたいだ」しばらく岩の間に身を伏せ、わざと上を見ないでアナスタシオ・モンタニエースが言った。

「コドルニス、この馬鹿め！……所定の位置を離れるな！」
デメトリオが唸るように言った。

彼らは匍匐して新しい位置に陣どった。

政府軍は勝どきをあげはじめ、射撃をやめようとしてい

た。その時、またしても弾丸が雨霰と飛んできて彼らを混乱におとし入れた。

「新手が加ったぞ」兵士達は叫んだ。

そして大恐慌を起こして多くの者は先を争って、てんでの馬に回れ右をさせ、逃げおくれた連中は馬を捨て、隠れ場所を求めて岩の間をよじ登った。指揮官たちは陣形をたて直すべく逃亡兵たちを狙い撃ちしなければならなかった。

「下にいる奴らを……下にいる奴らを」デメトリオは自分の三〇・三〇式の銃を水晶の糸のように光る川の方に向けて叫んだ。

一人の兵士が流れに転落した。そして、一発撃つごとに、確実に一人また一人と落ちていった。しかし、川の方に向かって撃っていたのは彼だけだったので、一人を撃ち殺している間に、十人乃至二十人ぐらゐの兵士達が、無傷で対岸の斜面を駆け登って行った。

「下にいる奴らを……下の奴らを」彼は怒り狂って叫んでいた。

仲間達は、今では武器を互いに融通しあい、的に狙いをつけては賭けをしていた。

「黒馬に乗っている野郎の頭をぶち抜かなかつたら俺の皮帯をやるぜ。さあ、お前のライフルを貸せ、メコ……」

「あの黒い牝馬に乗ってる奴を倒させてくれたら、モーゼル

の弾二十発とソーセージ半バラだ！……よし……それっ！
……あの見事な跳ねっぷりはどうだい……鹿みてえじゃねえか！……」

「逃げるな、インチキ信者め！……デメトリオ・マシーアス神父さまのお顔でも拝みにこい……」

罵詈雑言を浴びせているのは、デメトリオの側であった。パンクラシオは石のように無表情なのつぺりとした顔を長くして叫んでいた。マンテーカーは首筋をひきつらせ、殺人鬼のように恐ろしい目をむいてすさまじい形相をしていた。

デメトリオは撃ち続けながら、大きな危険が接近していることを味方に警告していた。しかし、この連中は側面からびゅんびゅんと弾丸が飛んでくるまで彼の絶望的な声に耳を貸そうとしなかった。

「やられた！」デメトリオは叫んで歯ぎしりをした。「畜生！」

そして、とっさにがけの方へと身を滑らせた。

二人が欠けていた。砂糖菓子屋のセラピオとフチピーラの楽団でシンバルを鳴らしていたアントニオであった。

「じきに戻って来るのじゃないかな」デメトリオが言った。彼らはうつうつとして帰途についた。ひとりアナスタシオ・モンタニエースだけが眠たげな目とひげ面に相変らずの気楽な表情をたたえていた。パンクラシオはおとがいの突き出た固い横顔を見せ、取りつくしまもないほどに冷静であった。

政府軍が引き上げてしまったので、デメトリオは山の中に隠しておいた馬をみんな引つ張り出した。

先頭にたつて進んでいたコドルニスがだしぬけに大声で叫んだ。いなくなった仲間がメスキートの樹の枝に吊されているのを見たのだ。

セラピオとアントニオであった。彼らだと分るとアナスタシオ・モンタニエースは口の中で祈りを唱えた。

「天にまします我らの父よ……」

「アーメン」ほかの者も低い声で唱えて頭を垂れ、ソンプレ口を胸に当てた。